

「虐殺観劇画面越し」

—初稿—

2025/3/17

脚本 太郎

〈人物表〉

淀川 文夏 (17)

女子高校生

黒須 哀 (21)

大学生

五十川 請 (21)

大学生。復讐者

1. 高校・教室（夜）

淀川文夏（17）、ハッと目を覚まし、
半身を起こす。

目の前には二人の男、黒須哀（21）と五十川請（
21）。淀川を恨めし気に覗き込んでいる。

淀川、恐怖に駆られた様子で辺りを見回す。

五十川「ようやくお目覚めか」

淀川「……何なんです？ 誰ですか？」

五十川「誰かだと？」

五十川、顔を憎悪に歪めて一步前へ。

五十川「てめえが殺した女の兄貴だよ」

淀川、茫然として、

淀川「え？」

五十川「え、じゃねえよ。妹の遺書にはてめえのことばっか書いてあったぞ」

淀川、何かに思い当たった様子で立ち上がり、

淀川「違います、わたしは何も……」

黒須、馬鹿にしたような口調で、

黒須「何も？」

淀川、黒須を見る。困った表情。

黒須「あ、俺はただの付き添い。車出してあげただけ。……それで？ 何もって？」

淀川「何も……してないんです。本当です。彼女を傷つけるよ
うなことなんてわたし、」

黒須「そうだな。君は何もしなかった。虐められてたあの子を
見捨てたんだ」

淀川、身を強張らせる。

五十川「アイツと特に親しい友達だったにも拘わらずだ」

淀川、声を詰まらせ、

淀川「だからって、何でわたしだけ」

五十川「お前だけじゃないさ。他の奴らも後で殺す」

淀川、愕然と、

淀川「……」

五十川、ポケットからスイッチングナイフを出し、
五十川「ああ」

刃を出す。

五十川「なぶり殺しだ」

淀川、窓の方に一歩後ずさる。

淀川、黒須に助けを求めるような視線を向ける。

黒須、失笑。

黒須「それと同じ目で君を見たあの子に、君はどうした？」

淀川、顔を引きつらせて目を泳がせる。

黒須、両手を広げて、

黒須「俺も同じようにする。何もしない。君と同じようにただ

ヘラヘラ傍観して、」

スマホを取り出し、構える。

動画撮影開始。

黒須「呑気に動画でも撮ってるよ」

淀川「そんな……助けてよ。だってわたし、」

黒須、また失笑。

五十川「同じ人間の言葉とは思えないな」

黒須、軽蔑の眼差しになって、五十川を指し示し、

黒須「ねえ、被害者遺族の前なんだよ？ よくそんなこと言え

るね？」

淀川「そんな」

黒須「人一人殺しておいて自分だけは助かりたいとかさあ、ま

るで人の皮を被った悪魔だよ。やっぱこんな奴死ななき

やだめだね」

淀川「殺してない。わたし殺してなんて」

五十川「見て見ぬ振りした奴も同罪って、よく言うだろうが」

五十川、ナイフを振り上げて一歩進む。

淀川、短く悲鳴を上げて後ずさり、

背中を窓と壁にぶつける。

淀川「やめてお願い、来ないで。殺さないで」

五十川、少し考えて、

五十川「お前の対応次第だな」

淀川、ハツとした表情。

淀川 「それって……」

五十川 「誠意を見せろ」

淀川、苦悩するように、

淀川 「何を、すれば？」

五十川 「そうだな」

五十川、少し考えて、

淀川にナイフを突きつけ、

五十川 「指で自分の目ン玉えぐり取って、食べ」

黒須、嘔き出す。

淀川、茫然と、

淀川 「は？」

愕然と、

淀川 「はあ？」

2. (スマホ画面越し) 高校・教室 (夜)

五十川、呆れたように、

五十川 「何だよ、冗談じゃねえぞ。やれよ」

淀川、震える手を目に近付ける。

泣きそうな顔で葛藤。

五十川 「早くしろよ。妹の痛みはそんなもんじゃなかったんだぞ」

淀川の息が荒くなっていく。

息を止め、手を下ろす。

淀川 「無理。できるわけない」

五十川、舌打ち。

五十川 「は？」

淀川、半泣きで開き直ったように、

淀川 「嫌。冗談じゃない。意味分かんないもん。何でわたしが

そんなことしなくちゃいけないの？」

3. 高校・教室 (夜)

五十川、淀川の腹を思いつきり蹴る。

淀川、崩れ落ち、

激しくむせ、えずく。

五十川 「腰抜けが」

黒須、心底苛立った様子で、

黒須 「君のその汚い目ン玉が、あの子の尊い命より価値があるって、そう主張してるのか？」

淀川、呼吸困難で答えられない。

黒須 「だとしたら度し難いよ。どこまで被害者を馬鹿にするんだ？」

五十川、淀川を何度も蹴り始める。

淀川の呻き声。

黒須、義憤に満ちた顔で、

黒須 「こんなクスにまで基本的人権が保障されてるなんてどうかしてるよ」

4. (スマホ画面越し) 高校・教室(夜)

黒須、唾を吐く。

スマホ画面の淀川がいる部分に唾がつく。

黒須 「なあ？ どいつもこいつも口を開けば人権人権。悪党にも人権。死刑囚にも人権。薄っぺらい人道主義がはびこってるせいで世の中はどんどんおかしくなってる」

五十川「は？」

黒須 「俺思うんだけどさ、人権ってのが本当に尊いものなら、誰彼構わず安売りして良いモンじゃないんじゃないの？ ましてやこいつ等みたいのには」

黒須、大きく手を広げて、

黒須 「何で人権にうるさい奴に限って人権を軽視するんだろうな」

五十川「お前急に何の話してんの？」

黒須 「こういう生きる価値のない糞はどんどん殺しまくれば世のため人のためなんだって話」

五十川、納得した様子で、

五十川「なるほど」

淀川を見下ろし、

五十川「てことで、お前死刑ね」

5. 高校・外観（夜）

淀川、4階の外壁のでっぱりに足を掛け、開いた窓の窓枠の下側に激しく震えながらしがみついている。

6. 高校・教室（夜）

淀川の泣き叫ぶ声が響いている。

五十川「どーん」

五十川、窓を思いきり閉める。

淀川の悲鳴。

両手は血まみれ。腕にはいくつか切り傷が。

しかし必死に窓にしがみついている。

五十川の持つナイフ、血が付いている。

五十川が再度窓を開ける。

憎々し気に、

五十川「しぶといな」

黒須、茶化すように、

黒須「凄いな。生への執着ってやつか」

淀川「お願いやめて！ 本当に死んじゃう！」

五十川「うん。殺そうとしてるんだよ」

五十川、再び窓を思いきり閉める。

悲鳴。

窓を開ける。

淀川、かすれた声で、

淀川「死にたくない」

黒須、一転して冷たい声で、

黒須「何それ？」

五十川と、淀川、黒須を見る。

黒須、義憤に燃えた顔。

黒須「この期に及んで、まともな人間なら言えない言葉だよな。

人を死に追いやつといて、まだ『自分の命』なんていう

私利私欲にしがみつこうなんて」

五十川、冷たい目で、

五十川「妹がそこから飛んだ時、きつと今のお前よりずっと痛か

ったし、怖かったんだよ」

黒須、何かに思い至った顔。

7.

(スマホ画面越し) 高校・教室(夜)

黒須 「あ、そうだ忘れてた。こんなん持ってきてきたんだ」
セカンドバックをあさり、スタンガンを取り出す。

黒須 「使う？」

言って、五十川に放る

五十川、受け取り、

冷たく笑う。

ナイフを仕舞い、

スタンガンのスイッチを短く押す。激しい音と電気。

淀川の短い悲鳴。

五十川がスタンガンを淀川の手付近ける。

淀川、激しく首を振り、

淀川 「嫌だ嫌だ嫌だ！ もうやめて許して」

五十川、淀川の右手にスタンガンを当て、スイッチ
を押す。

激しい音と電気。淀川の悲鳴。

反射的に手を離す。

すぐにまた窓枠に掴まるも、

勢いで外壁のでっぱりから足を踏み外し、両手だけ
でぶらさがる格好に。

五十川は電気を流したまま、今度は淀川の逆の手に
スタンガンを押し当てる。

淀川、泣き叫ぶも、今度は手を離さない。

黒須笑いながら、

黒須 「醜い根性だなあ」

五十川、淀川の背中や脇に短い間隔で何度もスタン
ガンを押し当てる。その度に淀川の悲鳴と黒須の笑
い声。

黒須、実況するように、

黒須 「クソゴミ、苦しんでいます。苦しんでいます」

淀川、上を向いて懇願の表情。

淀川 「(物凄い早口で) お願いしますお願いしますお願いしま

すお願いしますお願いしますお願いしますお願いします

黒須 「何か狂気感じるわ。必死過ぎで引くっつーか」

五十川、冷めた表情で唾を吐く。

唾が淀川の顔につく。

五十川 「もう良いって」

五十川、淀川の口の中にスタンガンを突っ込む。

淀川 「んんんんんんんんんんんんんんっ！ んんんんんん

んんんんんっ！」

淀川、鼻から激しく鼻水を噴く。

五十川がスタンガンのスイッチを押す。

スタンガンの電気の音。くぐもった悲鳴。

落ちていく淀川。

8. (スマホ画面越し) 高校・教室 (夜)

スタンガンの電気の音。くぐもった悲鳴。

落ちていく淀川。

黒須、ゲラゲラ笑う。

ドサリという音。

黒須、スマホの録画停止ボタンをタップし、

スマホをを視界から外す。

9. 高校・教室 (夜)

黒須、スマホを視界から外し、

茫然とする。

黒須 「え？ ……え？ マジ？」

顔が青ざめる。

急いで窓辺にかけ、

五十川を押しつけ、

五十川 「おい」

下を見る。

黒須、震える声で、

黒須 「ま、マジで殺した感じ？ え、ヤバくね？」

五十川、驚いた様子で、

五十川 「お前、今頃何言ってるんだ？」

終